

## コミンテルンの統一戦線論

嶋崎, 譲  
九州大学法学部教授

<https://doi.org/10.15017/1358>

---

出版情報 : 法政研究. 25 (2/4), pp.381-398, 1959-03-05. 九州大学法政学会  
バージョン : published  
権利関係 :



# コミンテルンの統一戦線論

嶋 崎 讓

## 目 次

- 一 はじめに
- 二 レーニンの大衆民主主義論と統一戦線論
- 三 C・I・一九二一年と一九二二年綱領と統一戦線
- 四 C・I・一九二四年綱領と統一戦線
- 五 むすび

## 一 はじめに

現代デモクラシーの危機的状況が特殊二〇世紀的大衆社会の状況の問題であるとは、多くの学者の指摘するところである。しかし、大衆社会の理論は、現実のデモクラシーの危機的状況の現象論的な問題設定としては多くのすぐれた示唆に富んではいたが、危機克服の方法論的考察には欠けていた。そこで私は、大衆社会の理論をふまえた上で、危機克服の方法論的考察のための問題提起を『大衆社会論の意義と限界』（向坂逸郎編『マルクス批判の反批判』新潮社刊、所収）において発表しておいた。その際、現代デモクラシーの危機的状況を二つの側面からとらえた。すなわち現代デモクラシーという条件のなかにおける政治的支配の側からのブルジョア・デモクラシーの自己否定の面と

それに対応する大衆運動の機構化<sup>II</sup>官僚化の両側面としてとらえた。そして、大衆社会論が、この両側面をふくめて、ブルジョア独裁の支配形態論としての問題提起をしたという意味で、その意義づけを行った。その意義は、デモクラシーの発展的な展望を変革の理論としてもっているマルクス主義の階級斗争論にとっての、戦術<sup>II</sup>組織論の前提の理論化であるという意味においてであった。しかし、この論文では、 $\wedge$ 階級の大衆化 $\vee$ <sup>II</sup> $\wedge$ 民主主義の空洞化 $\vee$ という大衆民主主義の保守支配を下から支える大衆運動の側面を、克服する方法論上の諸問題は明らかにしていなかった。

$\wedge$ 階級の大衆化 $\vee$ とは、大衆民主主義のもとにおいて、支配階級が政治的支配を貫徹させる条件を、労働者組織の側から支える現象形態であるといえることができる。すなわち $\wedge$ 階級の大衆化 $\vee$ は、十九世紀の終り頃まで政治的、経済的に体制外的存在であった労働者階級を中核とする民衆が、政治的主体として、大衆民主主義的な政治体制のなかに組み入れられると同時に、彼らの歴史的な革命的な性格が、空洞化し、それが支配体制へと再編成されることを通じて、保守的性格に転化するその過程であるといえることができる。支配階級の側からの福祉国家的な政策の機能に対応して、階級組織としての労働者組織が、その組織の形態変化をとげ、階級を大衆化させる過程である。<sup>(二)</sup>

このような過程を、シュトルムタールは、プレッシャー・グループ論との関連で、労働運動の圧力団体化およびそれに対応する社会主義政党の圧力団体化の現象として特徴づけた。<sup>(二)</sup>彼によれば、労働大衆の多数が、社会体制の基本的改革こそが自分たちの直接の利益だということを実践によって叩きこまねなければ、労働運動は、本当の意味での政治的運動にはならない。ところが現実には、労働運動のプレッシャー・グループ的な意識とその究極の社会主義的目的とのギャップ、いいかえれば、単なる労働組合的な諸要求とその発展的な展望としての政治的、経済的な政党の政策指導との間のギャップが生じている。この現象は、労働組合が、自己のセクショナルな利益の追求に終始する圧力団体化

し、社会主義政党が、革命的党の扮装をつけながら、実は労働組合運動の議会内機関にすぎない圧力団体化した形態をとる。このように労働組織が圧力団体化してしまつたならば、そのような形態へとおいやつた強大な社会的な強制力（大衆民主主義的な保守支配の条件）を打破することはできない。彼は、このように労働運動の圧力団体化を特徴づけ、その克服策として、労働運動が自己の利益を社会的制度的変革の必要性と結びつけることを可能にさせるような政治的行動<sup>ボリテイヤル・アクティビティ</sup>を主張している。このような抽象的な解決策に止まっているのは、この書の目的が第一次大戦ごから第二次大戦にいたる間のヨーロッパ・デモクラシーの敗北を、労働運動の崩壊と関連させ、さらにその原因を、労働運動のプレジャー・グループ的行動に見出そうとしたことにあつたためであろう。

シュトルムタールの問題提起をもふまえて、労働運動と社会主義運動の圧力団体化を、大衆民主主義の上からの福祉国家的政策機能に対応する下からの労働者組織の官僚化、すなわち圧力団体化の現象形態として捉えるならば、そのような傾向に見合った政治指導や労働運動の指導のイデオロギーは、マルクス主義的<sup>三</sup>にいうならば、社会民主主義ないし改良主義的イデオロギーといふことができる。かくて、労働組合運動の圧力団体化が、労働組合の反体制的性格を体制内存在たらしめている傾向であるとするならば、労働運動の圧力団体化を克服し、反体制の主体へと組織化するという課題は、そのような傾向への政治指導のイデオロギーとその担手の本質を明らかにし、社会民主主義の批判と克服を通じて、労働運動を反体制に転化させてゆくという課題となる。この課題を実現する運動理論として、現代コミニズムは、社会民主主義と共産主義との統一戦線の問題を提起している。とくにソ同盟共産党二〇回大会以後、その問題が数多く提起されている。

しかし、今日、問題となっている統一戦線の理論は、多くの大衆が社会民主主義の影響下にある以上、この大衆を、現代コミニズムの指導の下に転化させるための、戦術的な利用論の傾向を克服していない。すなわち第二次世

界大戦ごの世界情勢の変化と資本主義諸国における経済的対立の変化の様相が、社会民主主義の物質的基礎をゆるがし、社会民主主義を反体制に転化させる要因をつくりだしたため、国際社会主義運動史のなかで形成された統一戦線の理論を実現し易い方向へと顕在化させたのであるというような議論はそれであろう。<sup>(四)</sup>

このような統一戦線論は、社会民主主義の利用論に終り、統一と団結を変革への展望とした、「社会主義への民主主義の道」という革命路線の理論からも離れてしまう。そこで二〇回大会で批判された、スターリン批判問題に関連する統一戦線論はいかなるものであったか。コミンテルン型統一戦線論（スターリン主義）がレーニン主義の継承であったのかどうか。もし継承でないとするならば、二〇回大会でいわれた意味での「レーニン主義に帰れ」とは、統一戦線論に関する限り、いかなる意味に解すべきか。この点、現代コミニズムの理論は明らかにしていないばかりか、混乱がある。そこで、本稿では、国際社会主義運動史のなかで形成された統一戦線論のあとを追いつながら、コミンテルン型統一戦線論の特徴を明らかにしてみたいと思う。

(一) 拙稿では、国家機構の中央集権化と民主主義的組織の中央集権化（組織の官僚化）の両側面として捉えた。そしてこの過程が、民主主義を形骸化させたのにたいし、この形骸化への危機意識として、サンヂカリズム、ギルド社会主義、修正主義などのイデオロギーを位置づけた（「マルクスの批判と反批判」三二六—三二九頁）。

(二) A. Sturmthal, *The Tragedy of European Labor 1918-1939*. 神川・神谷訳「ヨーロッパ労働運動の悲劇」岩波現代叢書。

(三) ソ同盟共産党二〇回大会におけるフルシチョフの報告。「アメリカにおける社会民主主義」（ポリティカル・アフエアズ、一九五七年一月）。「イギリスにおける統一についての論争」（世界政治資料四号）。一九五六年六月イタリア共産党P・トリアッティの報告。第四回世界労連大会におけるルイ・サイヤンの報告などである。

(四) 例えば中林賢二郎「社会民主主義と共産主義」(『現代マルクス主義』講座三巻、大月書店)。

## 二 レーニンの大衆民主主義論と統一戦線論

コミンテルンが統一戦線のための改良主義との統一行動の意義をテーゼとして示したのは、一九二一年七月のコミンテルン第三回大会においてであった。そして、つづく一九二二年の第四回大会では、「戦術に関するテーゼ」のなかで「統一戦線戦術」を明確に打ちだすにいたった。このとき以来、統一戦線論はコミンテルンの重要な運動戦術となったのである。

統一戦線の問題を綱領化させた理論上の動機は、レーニンの一九二〇年の『共産主義の左翼小児病』であった。この書の書かれた歴史的背景はこうである。一九一九年のコミンテルンの結成は、ロシア革命を擁護し、ソヴェト制が議会主義よりも民主主義のより優位な形態であることを説く国際主義的な党を必要として生れ、しかもこれらの党は各国の革命的な高揚期に革命を組織する主体的勢力を必要としたことから生れたものである。しかし、各国の共産党が、ロシア革命とソヴェト体制の擁護と革命の主体を組織化するために共産党を結成すること、各国における議会主義を機械的に否定し、大衆団体から機械的に切り離された革命的反対派を結成することを同一視した傾向を生んだ。このような傾向にたいしてレーニンは、西欧のブルジョア・デモクラシーが支配している国では、プロレタリア革命への移行と接近の特殊の形態を考えだすことが各国プロレタリア党の任務であり、その限り議会主義を評価せねばならないことを説く必要があったのである。

レーニンの思想には二つの側面がある。一つの側面は、革命のロシア的民族な発展の特殊性を貫く、革命にとっての一般的な問題を強調する場合の発想であり、いま一つは、革命にとっての一般的な側面がロシアにおいて特

殊的に具体化した側面を強調する場合の発想である。前者を教条的にレーニン主義と理解すれば、ロシア革命の方式を西欧のブルジョア・デモクラシーの支配する国において普遍化する、左翼小児病が生れる。後者からは、ロシア的条件と西欧的な条件とを条件的に考えることが可能となる。レーニンの「左翼小児病」と統一戦線の理論は、後者の発想から生れた議論である。すなわち西欧のブルジョア・デモクラシーが支配している国における大衆運動をその条件のなかで階級的に組織化するための運動理論であったということができる。ロシア革命の条件からは生れないものである。そこで、レーニンが西欧の条件のなかで、一方では社会民主主義や改良主義と分裂して共産党を結成することを指導、他方でそれとの統一戦線を主張した理論的根拠を簡単にさぐる。この根拠は、レーニンの西欧デモクラシーの評価と社会民主主義の理解の問題となるであろう。その説明が一九二一年、一九二二年綱領の理解の方法となるのである。

レーニンは、統一戦線を必要とさせる条件として、(一)大衆民主主義への移行とそれにもなう改良主義の発生的根拠を明らかにすること、すなわち大衆民主主義の保守的側面を明らかにすること。(二)それと同時に大衆民主主義それ自体が階級的な大衆運動にとっての積極的な役割を果す構造的な性格をもっていること。これら二つの側面を示すことによって、大衆民主主義的条件が統一戦線運動を条件化させることを明らかにしようとしていたのである。

レーニンは「平和な」時代における資本主義が、資本主義の最高段階である帝国主義に到達したことを強調した。そして帝国主義への移行が大衆民主主義という条件を規制する新しい社会形態を作りだし、その政治過程のなかで改良主義が生みだされたことを明らかにした。すなわち

ブルジョア・アジアのプロレタリアートにたいする斗争の方法は、十九世紀後半の西欧では、「従来の暴力的方法、労働運動に少しの譲歩も認めない方法」を、「ブルジョア一般の政策の一変種、流行おくれ」となそうとしており、それに代って「『自由主義の方法』、政治的権利を発展させる方向へ、改良、譲歩等々の方法へ、歩を進める」

と、ブルジョア階級の斗争の変化を重視している。

ブルジョア階級が一方の方法から他の方法に移ったのは、「個々の人物のたくらみや、偶然によるものではなく、彼ら自身の地位が根本的に矛盾しているからである。正常な資本主義社会は、代議制をかためずには、住民がある程度の政治権利をもたないでは、首尾よく発展することはできないし、この住民は、『文化』の点で比較的高い要求をもっていることを特徴としないわけにはゆかない。こういう風にある最少限の文化性が要求されるのは、高度の技術、複雑さ、屈伸性、可動性、世界的競争の急速な発展、等々を伴う資本主義的生産様式そのものの条件によって生みだされる」のである。<sup>(二)</sup>

例えば十九世紀の六〇年代と七〇年代のイギリス、ドイツの一八九〇年の「讓歩」への轉換がそれである。<sup>(三)</sup>

したがって「この時代は議会政治とすべての合法的可能性との利用、大衆的経済組織と政治組織の創設、広汎な労働者定期刊行物の創刊などのような重要な斗争手段を労働者階級におしえた」という大衆民主主義の積極的な面を持ったと同時に「この時代は階級斗争を否定し、社会平和を説き、社会主義革命を否定し、ブルジョア帝国主義をみとめるような傾向を生み出した」<sup>(四)</sup>のである。

レーニンは、帝国主義への移行に際してのブルジョア階級の戦術変化すなわち讓歩が、労働運動および労働者党に基本的な意見の相異を生み、そこに改良主義が発生したことを示そうとしたのである。

この改良主義を支えるものに労働者の一定の層（労働運動内の官僚、植民地からの搾取にもとづく所得また世界市場での「祖国」の特権的地位からの所得の一部のおこぼれをもらう労働貴族）や社会主義諸党内の小ブル的同伴者をあげる。ブルジョア階級の「超過利潤こそ労働運動内の日和見主義をささえる経済的基礎」<sup>(五)</sup>である。この超過利潤による買収は「もっとも大きな中心都市で文化をたかめ、教育機関をつくり、協同組合の指導者や労働組合の指導者や議



会の指導者のために何千もの数限りなく多数な方法によってなされ」、買収の目はブルジョアシーの讓歩と不可分に結びついてはりめぐらされている。この結合が「合法的労働団体の役員、国会議員、その他合法的大衆運動のもとにあるインテリゲンチヤ、最高給をもらう労働者の若干の層、下級事務員その他」の(六)小ブル的、非プロレタリア分子を生みだし、改良主義、日和見主義の社会的支柱たらしめている。

以上のようにレーニンは、帝国主義段階への突入にともなう社会形態の変化（階級の階層化↓新中間層の形成、プロレタリアートの上昇化）に対応した大衆民主主義という条件を、階級斗争の見地からとらえ、ブルジョアの支配に下から対応する形態とイデオロギーを改良主義、社会民主主義の本質とみたのである。

これと同時に大衆民主主義の積極的な面をも評価していた。レーニンは、ピアタコフの「帝国主義は勝利した。だから政治的民主主義の問題を考える必要はない」という「帝国主義的経済主義」を批判し、資本主義と民主主義、民主主義と社会主義との関係を次のように説明している。

「一般に資本主義、とくに帝国主義は、民主主義を幻想にかえる。——だが同時に資本主義は、大衆のなかに民主主義的志向を生みだし、民主主義的制度を作りだし、民主主義を否定する帝国主義と、民主主義をめざす大衆との敵対を激化させる。資本主義と帝国主義を打倒することは、どのような、どんなに『理想的』な民主主義的改造をもってしても不可能であって、経済的変革によって可能である。しかし、民主主義のための斗争で訓練されないプロレタリアートは、経済的変革を遂行する能力をもたない。」

「民主主義の問題のマルクス主義的解決とは、要するに、階級斗争をおこなっているプロレタリアートが、ブルジョアシーにたいするプロレタリアートの勝利、すなわち、ブルジョアシーの打倒を準備するために、すべての民主主義制度とブルジョアシー反対の志向とを利用することである。」

「社会主義はプロレタリアートの独裁を通じてよりほかには実現されえない。ところでこのプロレタリアートの独裁は、ブルジョアジーすなわち国民のなかの少数者にたいする暴力と、民主主義の完全な発展すなわちあらゆる国事への、また資本主義廢絶のあらゆる複雑な問題への全国民大衆の、真に権利を同じくした、真に全般的な参加の完全な発展とを結びつけるのである。」<sup>(七)</sup>

このようにレーニンは帝國主義段階における大衆民主主義の發展的な側面がプロレタリアートによって担われていることを明らかにしようとしていた。だから「正しい民主主義的要求を前の方にむけないで、社会革命の方向にむけないで、後の方に、平和な資本主義の方向にむけた」<sup>(八)</sup>改良主義に対しては徹底的なイデオロギー斗争をもつてのみ、その影響下にある大衆を革命の方向に組織化するために統一戦線の問題を提起したのである。つまり『左翼小児病』のなかで、改良主義の影響下にある労働組合を外から批判して、別個に、革命的に純化された大衆団体を組織しようとしたり、また議会主義を輕視した共產主義者にたいし、大衆のなかに入ることとを教えたレーニンの理論は、大衆民主主義の条件とその構造の運動にのることなしには、いいかえれば、その民主主義的条件を社会革命の方向に転化させるために努力することなしには革命的主体の形成はありえないことを示したものである。したがってレーニンの統一戦線論の方法は、西欧の大衆民主主義の条件下における民主主義運動の展開のためのものであったといふことができる。つまり、民主主義！社会主義への道という路線における戦術的展開であったのである。

(一) 「ヨーロッパ労働運動における意見の相異について」レーニン全集十六卷、邦訳、三六七頁―三六八頁。

(二) 同上。

(三) 「ロシア社会民主労働党在外支部会議」レーニン全集二十一卷、一五五頁。

(四) 同上。

- (五) 「国際状況と共産主義インターナショナルの基本的任務」レーニン二巻選集、社会書房刊、十二分冊一三〇頁。
- (六) 「これからどうなる」レーニン全集二十一巻、邦訳一〇〇頁。
- (七) 「ペ・キエフスキー（ユ・ピアタコフ）への回答」レーニン全集二十三巻、一七頁―一八頁。
- (八) 「発生しつつある『帝國主義的經濟主義』の偏向について」全集二十三巻、九頁。

### 三 C・I・一九二一年―一九二二年綱領と統一戦線

『左翼小児病』の批判は、コミンテル第三回大会（一九二一年）に反映し、一九二二年代に各国で具体化されつつ、第四回大会（一九二二年一月）の綱領において明確にされた。第三回大会の『大衆へ』のスローガンはその出発点であった。このスローガンの意味したものは、勤労大衆の圧倒的な多数が改良主義の影響下に組織されているとき、共産主義者が、そのような体制の外から、革命的な言辞を弄して改良主義を批判し、大衆を軽蔑しているのではなく、体制内の運動法則に則り、体制内の発展的なモメントを社会革命に組織化してゆくことである。その発展的なモメントとは、大衆の日常的な政治的、経済的要求を行動に組織化してゆくことである。その精神を生かして一九二二年一月コミンテルン執行委員会は、『プロレタリア統一戦線のために』<sup>(二)</sup>という宣言を発表した。

この宣言では、改良主義的指導層を批判して、「第二、第二半およびアムステルダム・インターナショナルのすべての約束はホゴに帰した。彼らは、民主主義と改革のための斗争においてさえ、プロレタリアートを指導することができないことを示してきた。なぜなら彼らはブルジョアジーとの同盟によって宿命的に無能にさせられているからであり、欲すると否とに關らず、ブルジョア支配の強化を援助しているにすぎないからである」とのべてはいる。しかし、同時に「彼らがプロレタリアートの直接的、日常的要求のための共同の斗争（共産主義者との）にたずさわるか

ぎり、彼らと分裂している意見の相異にもかかわらず、プロレタリアートによって支持されたすべての諸党との統一戦線の確立」を説いている。そして改良主義的諸党が「資本に反対する共通の防衛斗争に共同して立ち上るように」プロレタリアート内での統一行動によって下から支持されるならば、「ブルジョアの諸党と彼らとの同盟をたつように強いられるであろう」とのべている。ここでは、改良主義に対する本質論的なイデオロギー批判は展開してはいるが、彼らが下からの統一行動に支えられるならば、革命的な反体制の統一戦線に参加する可能性をみとめているところに特質がある。この点、当時コミンテルンの統一戦線論の指導理論家であった、トロツキーの『統一戦線について』<sup>(三)</sup>はもっと明確である。

「統一戦線の問題は、その起源から、またその本質からみても、社会主義者と共産主義者の議会フラクション相互の関係やこれら諸党の執行委員会相互の関係の問題ではない。統一戦線の問題は、労働者階級の政治的組織の分裂にもかかわらず、資本に対する斗争における統一戦線結成へと労働者を組織化してゆくことを可能にさせる必要性から生れたものである。」

「統一戦線は、改良主義的諸組織の態度とわれわれの行動とを実践的に一致させようとするわれわれの意思と用意のあることを仮定している。ただしきまった問題で、限られた範囲内であり、彼らの組織が、なおどうプロレタリアートの可成りな部分の意志を表現している限りにおいてである。しかしわれわれは、彼らとの結合をこわさなかつたか。もちろん分裂した。それは労働運動についての基本的見解が対立したからである。それにもかかわらず、われわれは彼らとの了解を求めるべきか。もちろんである。彼らを支持し、またわれわれを支持する勤労大衆が、統一行動に立ち上り、また改良主義者が、多かれ少かれ、このような斗争に役割を果すように強いられている場合においてである。」

「われわれは、改良主義や中央派の諸党とは分裂した。それは労働運動内部における裏切りと欺瞞を無制限に批判する自由をもつたためであった。この理由で、批判と煽動のわれわれの自由を、いかなる方法でも制限する協定には応ずることはできない。われわれは統一戦線に参加するが、一瞬たりともそれに解消することはできない。われわれは独立した単位として参加する。」

これら統一戦線の戦術は、大衆民主主義を前提として、大衆を民主主義運動に組織化してゆく路線のなかで、革命的主体を強化する戦術として提起されたものであることはもはや明らかである。だからソヴェト革命それ自体を目的としたり、暴力革命それ自体を目的とする戦術ではない。それだからこそ、レーニンは、一九二四年の大会の演説で、西歐条件とロシアの条件との混同をいしましたのである。すなわち「一九二一年大会の決議は……立派なものであるがそれはまったくロシア的である。すべてがロシアの条件からとりあげられている。……それゆえに外国人にはまったく理解されない。だが彼らは、聖像のように部屋の片隅にかけて、それにお祈りをあげて満足しているというわけにはいかない。……彼らはロシアの経験の一部をつかみとらねばなるまい。それがどういふ風に行われるかわたくしは知らない。……われわれロシア人もまた、この決議の基礎を外国人に説明する方法を捜し求めねばならない。そうしなければ、彼らは、この決議を実行することはできない。……外国人たちは革命活動の組織、構成、方法、内容をつかみとるために、特殊な意味で学ばなければならぬ<sup>(四)</sup>。」と。

かくて第四回大会は、統一戦線の戦術とそれにもとづく労働者政府の問題を提起して次のようにのべた。

「統一戦線の戦術は、共産主義の前衛が、広汎な勤労大衆の最も大切な利益を守る日常斗争のなかで、先頭に立たなければならぬということの意味する。これらの斗争のなかで共産主義者は、裏切者の社会民主主義者や阿姆斯特ダム労働組合の指導者とさえも話し合いをする用意がある。統一戦線をあらゆる労働者政党の組織的合意であるかの

ように見せかけようとする第二インターの企てはもちろん決定的に論破しなければならない。

独自の共産主義政党の存在とブルジョアジーならびに反革命的社会民主主義にたいするこの党の完全なる行動の自由は、プロレタリアートの最も重要な歴史的業績である。共産主義者はいかなる状況のもとにもこれを放棄しないであらう。……

統一戦線を遂行するに当って、煽動的成果だけでなく、組織的成果をあげることがとりわけ重要である。勤労大衆自身のなかに、組織的足場（工場評議会、あらゆる政党の労働者と無党派の労働者からなる行動委員会）をつくりだす機会を一つも逃してはいけない。

統一戦線を実現できるのは『下からの』すなわち勤労大衆自身の深部からである。」

そして労働者政府の問題を提起して次のようにいっている。

「共産主義者は、ブルジョア政権に反対してたたかい、ついにはこれを転覆するためには、経済と政治の分野におけるすべての労働者の統一戦線とあらゆる労働者政党の連合を対置させている。」それにもとづく「労働者政府は、それが大衆の斗争から生まれ、たたかうことのできる労働者諸団体、勤労大衆のうち最も抑圧された部分によって作りだされた諸団体によって支持されている場合のみ可能である。議会における諸事件の交戦によって作りだされ、したがってまったく議会を起源とする労働者政府でも、革命的労働運動を活気づける機会を与えることがありうる。」

「一定の状況のもとで、共産主義者は、非共産主義的な労働者諸政党や労働者諸組織とともに労働者政府をつくる用意があることを宣言すべきである。……だがそれはブルジョアジーにたいし真に斗争する保障があるときだけである。」<sup>(五)</sup>

以上の綱領とそれを貫く問題状況から統一戦線の戦術は次のように理論化することができると思う。

統一戦線は、社会主義政党が分裂してゆくなかで、ブルジョア政権が強化されてゆくのにたいし、労働者階級の統一と社会主義政党の相互批判にもとづく統一行動を意味する。またそれは、議会主義（大衆民主主義）を前提とし、ブルジョア政権の反革命ないし民主主義の否定に対抗する戦術である。いわば、反動期の戦術として、議会主義的民主主義を前提にしての民主主義を擁護する（政治的自由の拡大、発展）なかで、革命的主体を強化する戦術である。したがって、民主主義と社会主義への路線にそった戦略的戦術であるということが出来る。すなわちエリート主義の前衛党論からは生れえない民主主義的、大衆運動の論理を前提とするものであるといわねばならない。<sup>(六)</sup>

- (一) 例えは、B. Paul, *The United Front and the Government Crisis in Italy* (Imprecorr., Vol. II, No. 45). E. Jay, *The Worker's Party of America and the United Front* (Imprecorr., Vol. II, No. 51). E. Meyer, *The National Council of German Communist Party on the United Front* (Vol. II, No. 45). A. Neurath, *The United Front and C. P. of Czechoslovakia* (Vol. II, No. 21). E. Peluso, *The Fight for the United Front in Italy* (Vol. II, No. 24). V. Stern, *The Austrian Social Democrats Sabotaging the United Front* (Vol. II, No. 33-34). など  
 ありあけである。

- (一) Documents, *The Communist International 1919-1943*, Vol. I, Oxford University Press, 1956. pp. 316-319.  
 (二) Trotsky, *On the United Front* (Imprecorr., Vol. II, No. 21).  
 (三) レーニン「ロシア革命の五カ年と世界革命の見透し」二巻選集、社会書房刊 十三分冊 二九八―三〇二頁。  
 (四) Documents, *The Communist International 1916-1943*, Vol. I, pp. 424-428.  
 (五) この規定は、すでに拙稿『マルクス主義政治学の再出発』（『中央公論』一九五七年四月号）で示しておいた。

#### 四 C・I・一九二四年綱領と統一戦線

コミンテルン第五回大会（一九二四年）を契機にして、それから反ファッシュヨ人民戦線が問題になりはじめた一九三三年まで、コミンテルンの綱領は急激な変化をとげた。第四回までに展開されたコミンテルンの統一戦線論は、ロシア革命へと発展したロシアの条件を頭においていたのではなかった。レーニンは、西欧の大衆民主主義（ブルジョア・デモクラシー）の支配している条件のなかで、議会主義を軽視し、合法的な大衆運動を無視した一揆主義を批判することを通じて、統一戦線論を提起してきたのである。ところが、一九二四年（第五回大会）以後の段階のテーゼは、大衆民主主義の構造の論理にもとづいて発展した統一戦線論を、ロシア革命の特殊的な発展のコースに利用する傾向を作りだした。<sup>(二)</sup>

一九二四年のコミンテルン第五回大会のテーゼは、統一戦線の採用の結果、コミンテルンの運動が革命的ボルシェヴィク的方法から日和見主義的戦術と改良主義的傾向へと変化したことを指摘し、各国の党は党内の日和見主義に反対し、党をボルシェヴィク化せねばならないことを強調した。「統一戦線はプロレタリアートにとっての煽動の方法であり、革命的動員の方法にすぎない。反革命的社会民主主義者との政治的同盟として、この戦術を説明する企ては、日和見主義であり、コミンテルンによって非難される。」そして「上からだけの統一戦術は、無条件に断固として非難される。最大の意義をもっているのは、下からの統一戦線である」とした。このように、政党レヴェルにおける統一の問題を強く拒否したことは、スターリンが当時の国際情勢を論じたなかで、「社会民主主義はファシズムの温和な一翼である」とした<sup>(三)</sup>、彼の『社会ファシズム論』のはじまりと関連しているようである。もはやこの段階以後、社会民主主義はファシズムの一翼なのだから、反体制の一翼を担う彼らの意義は認められなくなる。そして大会



の綱領は、さらに統一戦線から引きだされる過渡的労農政府（連立政権）の問題を提起して次のようにいう。「統一戦線戦術から引きだされる労農政府を社会民主主義者との政治的同盟としてブルジョア・デモクラシーの枠内に止めておこうとするのは日和見的である。」「労農政府は、ブルジョアシーを転覆させ、ソヴェト体制を樹立するために大衆を煽動し、動員する方法以外の何ものでもない。」「ブルジョアシーを転ブクさせ、その抵抗を抑圧し、労農政府樹立の条件をつくりだすものは、プロレタリアートの武力的抵抗の手段によってのみ可能である。」

この見解は、(一)統一戦線が民主主義擁護をそれ自体目的として性格を忘れて、統一戦線をソヴェト型のプロレタリア独裁の手段と考えている。(二)その結果、統一戦線を主張しながら、社会民主主義との提携を拒んでいる形をとり、(三)これらの統一戦線への理解は、暴力革命（武力）への準備のためのものである。このような思考方法は、議会主義を前提とした諸国の条件とそこで具体化された統一戦線の理論を、その条件を無視し、ロシア革命型に利用しようとする傾向を示している。

このような思考方法は、ロシア革命の民族的、特殊的性格を貫く、革命にとっての一般的な問題を不当に拡大し、各国にそれを普遍化した教条主義を意味する。それと同時に西欧の大衆民主主義の構造を前提とした運動法則を無視する傾向を意味するから、大衆的支持をうることはできない。そこから体制からはじきだされる。そこから目的意識的に革命を創造しようとする観念主義が生れ、それが、ラディカリズムに転化してゆくのである。つまりかかる思考方法は、レーニンの思想の第一の側面すなわちロシア革命の特殊性を貫く一般性の強調の、教条的理解にもとづく発展形態であるということができる。その意味で、レーニンの統一戦線論の発想的基盤からの逸脱であったといわねばならない。

かくて、第五回大会での統一戦線論は、西欧の体制外的な条件での運動の傾向を示したため、成功をおさめること

ができず、一九三三年のドイツ・ファシズムの成立を期に、レーニンの統一戦線へと反ファッショ斗争のなかで、転換してゆくのである。<sup>(四)</sup>

(一) 本稿では、統一戦線論の政治原理的アプローチなので、歴史的説明はしない。歴史的な説明のヒントは、拙稿「マルクス主義政治学の再出発」『中央公論』一九五七年四月号参照。

(二) Stalin, On the International Situation (Imprecorr., Vol 4, No. 27) .

(三) Imprecorr., Vol. 4, No. 62, 29 th August 1924.

(四) 本稿では、「反ファッショ統一戦線」への転換とその意味するものまでは論じていない。その点は更に稿を新める積りである。

## 五 む す び

以上の処論から、ソ同盟二〇回大会で批判されたスターリン主義的な統一戦線論の特徴とその大会でいわれた「レーニンへ帰れ」といった意味も明らかになったと思う。統一戦線の理論は、民主主義→社会主義への道における重要な戦術として位置づけようと思うのであるが、それゆえ、社会主義への平和革命の路線とも関連させて今日改めて提起されてきているのである。

本稿では国際社会主義運動史上の問題として、一九二三年から一九二四年にかけて、一つの転換が行われていることを論証し、その転換は、レーニン主義から不可避的に発展したものであるとして把握していない。つまり、レーニン主義からスターリン主義への継承は、レーニン主義の一つの側面の継承にすぎないことを示したつもりである。この点、今日までの国際社会主義運動史研究に大きな欠陥がある。例えば、ブルジョア的立場からのコミンテルン研究で今日

評価されている、F・ボルケナウの『ヨーロッパ共産主義』<sup>(一)</sup>という書物も、コミンテルン型（スターリン的）統一戦線論は、レーニンの思想の直線的発展形態としてとらえ、コミンテルンの統一戦線論の失敗をレーニン主義から説明しようとしている。<sup>(二)</sup>また、マルクシズムの側からの研究の場合も同様な欠陥をもっている。例えば、Z・フォスター『三つのインターナショナル史』<sup>(三)</sup>という書物においてもレーニン主義からスターリン主義への移行は、何ら矛盾なき発展的展開として敘述されている。わが国における研究も同様である。<sup>(四)</sup>この意味で、国際社会主義運動史上の問題として以上の処論が一つの問題提起であると考えている。

しかし、本稿での目的は、改良主義との統一戦線の現代的課題が、大衆民主主義の民主主義的な発展のモメントを社会革命の方向に組織化してゆく課題の問題であったし、現在もそうであること、その意味で、改良主義の批判と同時に、現代コムニズムの運動史上の欠陥の自己批判をも徹底的に行わねばならないことの必要性をも明らかにしたかったのである。

(一) F. Borkenau, *European Communism*, London, 1951.

(二) *ibid.*, pp. 25-68.

(三) W. Z. Foster, *The History of Three Internationals*. International Publisher, 1955. この書評については、拙稿「三つのインターナショナルの歴史」(雑誌『社会主義』一九五六年六月号)がある。

(四) 山辺健太郎『コミンテルンの歴史』、神山茂夫『統一戦線戦術の諸問題』新科学社刊、中林賢二郎『社会民主主義と共産主義』(『現代マルクス主義講座』三巻、大月書店)。